

大学史資料センターの研究機能

大日方 純 夫

一 資料センターにおける研究

二〇一八年は、大学史編集所の発展的改組により大学史資料センター（以下、資料センター）が発足して二〇年目の年であった。この二〇年間に資料センターは、二〇〇八年、二号館から一二〇号館（旧早稲田実業校舎）に移転し、さらに二〇一三年、現在の東伏見に移転した。東伏見に移って、はや五年が経過したことになる。また、大学史編集所の前身、校史資料室の時代に創刊された『早稲田大学史記要』（以下、『記要』）は、本巻をもって第五〇巻となった（本巻に創刊以来の総目次を掲載した）。

資料センターは、「本大学の歴史、創設者大隈重信および関係者の事蹟を明らかにし、これを将来に伝承する」（資料センター規程第二条）ことを中心的な業務とする機関である。そうした立場から、これまで早稲田大学史に関する論

稿や、大隈重信を対象とする論稿などを『記要』に掲載してきた。また、講演会・シンポジウムなどを開催し、その講演・報告を『記要』に掲載してきている。

「本大学の歴史」に関しては、二〇一〇年度から、二〇三三年の創立一五〇周年を期した『早稲田大学百五十年史』編纂事業が正式に開始され、資料センターがその事務を担うこととなった。編纂業務を担うためには、研究機能の強化が不可欠である。また、この業務とかかわって、二〇一五年以来、大学史セミナーを開催して、大学史編纂のあり方について深める活動を展開してきている（各講演録は『記要』に掲載）。

他方、「創設者大隈重信」の「事蹟」に関しては、創立一二五周年記念事業の一環として、二〇〇四年一〇月に資料センター編『大隈重信関係文書』全一一巻の翻刻・出版を開始し、二〇一五年三月に完結した。^①それは、大隈研究にとどまらず、近代日本研究の多様な分野に寄与し、近代日本像の再構築に貢献していくことを期した企画であった。編纂・刊行のためには、大隈宛書翰を収集・整理し、正確に翻刻し、一通ごとに年代を確定する作業を重ねなければならぬ。当然のことながら、そのためには多大な調査・研究が必要とされた。^②また、二〇一二年からは、佐賀市大隈記念館（二〇一七年に大隈重信記念館と改称）主催の「大隈祭」における講演記録ないし講演にもとづく論稿を『記要』に掲載してきている。

しかし、「創設者大隈重信および関係者の事蹟」については、まだまだ不明な部分が多々残されている。

たとえば、大隈を助けて東京専門学校を開校した中心人物は小野梓であるが、小野がアメリカ、ついでイギリスに留学した時期についても、不明な点が多い。そのうちの小野がアメリカに向けて出航した時期については、これまで「一八七一年二月頃」とされてきた。重要な拠り所となってきたのは、大学史編集所編『小野梓全集』別冊（早稲田大学、一九八二年）に収録された小野の「年譜」である。しかし、先般、小野の米英留学の時期に関する履歴事項に検

討を加えた結果、小野が横浜を中航したのは、従来の通説・定説よりも一年遅い「一八七二年三月二六日（陰暦の明治五年二月一八日）」であることが確認された（『記要』第四六巻参照）。

また、小野のもとで、高田早苗とともに東京専門学校の創設にあずかり、早稲田大学「四尊」の一人とされる天野為之の生年についても、検証すべき事実が残っている。二〇一五年九月、当資料センターが発行した『図録 大隈重信の軌跡』（以下、『軌跡』）は、天野の生年を「1859」と記載した。これに対し、『軌跡』をご覧になった方から、通常、天野の生年は「1861年」を使っているとの指摘をいただいた。

天野の生年については、「万延元年」説と「安政六年」説があり、『軌跡』は天野の生年が戸籍上、安政六年一二月二七日となっていることから、「安政六年」に対応する西暦の「一八五九年」をこれにあてた。しかし、安政六年の一二月二七日（陰暦）は、陽暦に換算すると、一八六〇年一月一九日にあたるから、戸籍を採用した場合でも、「1860」とすべきだったともいえる。

『早稲田大学百年史』は、「万延元年十二月二十七日」、「江戸唐津藩下屋敷に生れた」として、「万延元年」説を採用している（第一巻、四八〇ページ）。そして、「天野の戸籍には、明治二十二年五月十五日願出により、出生年を万延元年から安政六年に訂正した旨が記載されている」として、これは、天野が衆議院議員選挙の被選挙資格を得るためだったと推定している（同、七二四～七二五ページ）。その根拠は、浅川栄次郎・西田長寿『天野為之』（実業之日本社、一九五〇年）が、天野の「備忘録」に「明治二年の頃に『帰郷、衆議院議員被選挙資格ラツクル』とあるのは、出生年月日が間ちがつていたという理由で、選挙当時、満三〇歳に達するように戸籍訂正を行つたのであろうと思う」としていることにある。したがって、変更以前の戸籍の記載によれば、出生年は「万延元年」≡「1861年」ということになる。

ちなみに、吉川弘文館『国史大辞典』の「天野為之」（西田長寿執筆）は、「戸籍上では安政六年（一八五九）十二月二十七日生まれであるが、実際は万延元年（一八六〇）十二月二十七日生まれである」と記している。平凡社『日本史大事典』も「万延元・十二・二十七」、吉川弘文館『明治時代史大辞典』も「万延元年十二月二十七日（一八六一年二月六日）」と、天野の生年を記している。こうしたことから、『軌跡』でも、天野の生年は指摘のように、「1861」とすべきであった。この機会に訂正しておきたい。

なお、現在、資料センターのHPで公開しているWeb版百五十年史資料集「早稲田人名データベース」では、天野の生年について、「万延元年12月27日（1861年2月6日）／安政6年12月27日（1860年1月19日）【戸籍上】」と記載し、「万延元年」説と「安政六年」説を併記する措置をとっている。

二 大隈重信をめぐる事実関係——若干の検証

（1）大隈重信がパークスと論争した際の通訳は誰か

早稲田大学では、二〇一五年三月の『大隈重信演説談話集』（岩波書店〈岩波文庫〉）の刊行につづいて、二〇一八年三月、『大隈重信自叙伝』を同じ岩波文庫の一冊として刊行した。私は『演説談話集』につづいて、この『自叙伝』の編集にも携わったが、編集の最終盤に至って、大隈が英公使パークスと論争した際の通訳に関して疑義が生じた。これは、同書付載の「大隈重信略年表」で、「一八六八年（慶応四／明治元）「閏四月三日、耶蘇教問題で英公使パークスと論争。交渉能力を評価される。」とした事実関係に関わる。『自叙伝』本文の該当箇所は「七 新政府に加わる——外交の初陣」の「3 耶蘇教問題をめぐる英公使パークスとの対決」のなかに含まれ、大隈の伝記のなかでもハ

イライトに属する部分である。『自叙伝』では、関係する記述に、「外交に於ける初陣」〔英公使パークスとの初対面〕「パークスとの対決」〔パークスとの喧嘩別れ〕「通訳シーボルトの評価と耶蘇教問題の処理」という小見出しをつけている。しかし、この「通訳シーボルト」に疑念が生じたのである。

ここでいうシーボルトは、鳴滝塾で多くの蘭学者・医学者を指導したシーボルトの子にあたり、たしかに『国史大辞典』の「アレクサンダー・シーボルト」の項には、文久二（一八六二）年から一八七〇年まで、英国公使館に勤務したとある。

『自叙伝』の底本としたのは、大隈の回顧談をまとめた『大隈伯昔日譚』（円城寺清編、立憲改進黨々報局、一八九五年）である。『自叙伝』の編集実務を担当した高橋史氏の調査によれば、『大隈伯昔日譚』以外に、『早稻田清話 大隈老侯座談集』（冬夏社、一九三二年）でも、大隈は「蘭人シーボルト」が通訳したと語っている。おそらく、こうした大隈の回顧談にもとづいて、『大隈侯八十五年史』（大隈侯八十五年史編纂会、一九二六年）、中村尚美『大隈重信』（吉川弘文館、一九六一年）、真辺将之『大隈重信』（中央公論新社、二〇一七年）など、大隈に関する伝記類は、いずれも通訳はシーボルトであるとしている。

しかし、『国史大辞典』によれば、シーボルトは遣欧使節徳川昭武一行に随行し、一八六七年には渡欧したと記されている。高橋史氏の調査によれば、ハンス・ケルナー著／竹内精一訳『シーボルト父子伝』（創造社、一九七四年）では、一八六七年一二月にビクトリア女王に謁見して、徳川昭武の通訳をしており、また、大英博物館と父親の資料に関する交渉をして、一八六八年七月に大英博物館に資料の移管が行われたと記されている（一八四～一八五ページ）。

徳川昭武に随行した渋沢栄一の「巴里御在館日記」には、シーボルトに関する記載が散見されるが（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』による）、大隈がパークスと論争した時（慶応四年閏四月三日、西暦一八六八年五月二四日）に最も近いのは、

四月二三日（西暦五月一五日）で、「シーボルト罷出る」と記載されている。シーボルトが日本に帰国した時期は明確ではないが、一八六八年五月二四日（慶応四年閏四月三日）時点では、ヨーロッパにいた可能性が極めて高い（日本にはいなかったと考えられる）。

こうしたことから、『自叙伝』では「外務省の雇員シーボルト」に注をつけ、シーボルト自体については、鳴滝塾で多くの蘭学者・医学者を指導したシーボルトが父であるとしつつ、「ただし、一八六七（慶応三年）から翌年にかけて、徳川昭武に随行して渡欧しているため、通訳にあたったのは別人だった可能性もある。」と記した。底本である『大隈伯昔日譚』の記載に疑念が生じたため、判明した事実関係に即して最低限の問題点のみ指摘することにとどめたのである。

では、通訳として大隈・パークス論争に立ち会ったのは誰か。論争当日の二日前の慶応四年閏四月一日（一八六八年五月三日）、パークスは大阪東本願寺掛所で信任状を天皇に提出した。これは、外国による新政府承認の最初であったが、『大日本外交文書』第一巻第一冊（外務省調査部編、日本国際協会、一九三六年）によれば、この時、パークスに随従した「属官」として、「エフオアダムス・「ミットホルト」・「サトウ」の三人の名が記されている（六三〇ページ）。萩原延壽『江戸開城 遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄7』（朝日新聞社、二〇〇〇年）によれば、アダムズは公使館書記官、ミットフォードは二等書記官、サトウは日本語書記官である（九四ページ）。

一九二一年に出版されたサトウ『一外交官の見た明治維新』下（坂田精一訳、岩波文庫、一九六〇年）によれば、この奉呈式に先立って、サトウは信任状を日本語に翻訳したり、参列する士官の人数について日本側と相談したりしなければならなかったという。そして、大隈・パークス論争の当日の「二十四日」（閏四月三日）について、つぎのように記載している（一九七ページ）。

初めて顔を見知った大隈八太郎（訳注 参与兼外国事務局判事大隈八太郎＝重信）という肥前の若侍が、自分は聖書や「草原本」（訳注 フレッシュマン 祈禱本を誤って発音したのを皮肉ったもの）を読んでいるから、この問題は充分心得ていると、われわれの面前で見えを切ったのは、多分この時だったと思う。大隈は長崎のアメリカ人宣教師ヴァーベック（訳注 フルベッキ）博士の弟子らしかった。

なお、大隈・パークス論争の場に同席した木戸孝允は、同日の日記に「大隈尤耶蘇之論を愉快に談す」と記しており（日本史籍協会『木戸孝允日記』第一、一九三二年、一六ページ）、また、その五日前、四月二八日には、「英人サトウ、ミットホール」と会った旨の記載がある（同、一三ページ）。

以上からみて、パークスと論争した際の通訳がシーボルトであったとするのは、大隈の記憶違いであり、サトウであった可能性が極めて高い。実際、サトウは「キリスト教問題が論議され」、「六時間の長きにおよんだ」この日の会議について、「私にとっては、英語から日本語へ、日本語から英語へと通訳しつづける六時間でもあった」と記しているのである（『一外交官の見た明治維新』下、二〇一ページ）。

（2）なぜ護国寺が大隈重信の墓所なのか

つぎにもう一点、大隈重信に関わる事実関係の一端に言及しておくことにしよう。昨年（二〇一八年）、大隈重信の墓所設置の経緯、すなわちなぜ護国寺が大隈重信の墓所となったのかを調査する必要が生じた。

前掲の『大隈侯八十五年史』（第三巻）は、大隈の葬儀に関して、国民葬が催された日比谷公園の門を出て、「君の墳墓の地と定められた音羽護国寺に向った」（六三七ページ）として、「君の霊は平生思慕した母堂三井子刀自の傍らで永久の眠りに入った」（六三八ページ）と記している。

大隈重信の墓所が護国寺となったのは、『大隈侯八十五年史』（第三卷）にあるように、母三井子を「護国寺畔に葬つた」とことと関わっていると考えられる。すなわち、母三井子は一八九五（明治二八）年一月一日、早稲田邸で死去し、「護国寺畔」に埋葬された。大隈の墓所は、その傍らに設定されたのである。また、大隈の葬儀は神式で執り行われた。これも、母親の葬儀にならったものであった。母の葬儀を神式とした事情について、『大隈侯八十五年史』（第三卷）はつぎのように記している（七五八ページ）。

王政維新の後、皇室の儀礼は総て神式で行はせらるゝ由を拝聞したので、母堂は君に向ひ「私も陛下の思召を奉戴して、神道を尊信し、葬式は子孫の後まで必ず神式にしたい」と伝へた。君はこの遺言に従うて、その逝去に当り神葬にした。

大隈死去の翌日、一九二二（大正一一）年一月一日付『読売新聞』はつぎのように報じている。

菩提寺は護国寺 母堂三井子刀自の傍に 石垣張りの六坪に睡る筈 侯爵家の菩提寺は小石川音羽町護国寺で墓地は約六坪ばかりを石垣を廻らしてあり侯爵母堂三井子刀自の石碑が一基寂しく立つてゐる

大隈の母の死去後、『郵便報知新聞』は連載「賢母逸話」のなかで、一八九五年一月八日、「神葬にせられし理由」をつぎのように説明している。神式とした理由とあわせて、護国寺に墓地を求めた事情についても言及しているので、長文にわたるが、そのまま引用する（ルビは一部を除いて削除し、適宜、句読点等を付した）。

刀自が今回の葬儀を神葬式にて執行されしにつきては、神葬を以て大隈家の家風なりと思ふ人も有るべけれど、これにつきても感ずべくしかも趣味ある一箇の話あり。同家にては先代より神葬式を家風とせらるゝにはあらず。現に四十五年前刀自の

良人^{おつと}大隈信保氏の葬儀を故郷佐賀にて執行ひし時には菩提寺に於て仏葬式にて執行し、刀自も他年^{みなまか}没りたらんには同所に葬られんと覚悟なりしかば、彭壽院祖嶽良倫といふ戒名まで授けられたり。其の後、御一新の後ちなりけり、刀自は伯爵に向ひ禁裏様にはいよく神道御皈依と御定め遊ばされたる上からは、我等とても其の御覚召に従ひ此後の葬式は神葬式にて執行ふべきは勿論なり、されば我身はいふまでもなく、御身等はじめ子々孫々みな此式にて葬られ同じ所に埋められんこそ願はしけれと語られ、其後も屢々このことを繰返へされしかば、伯爵に於ても万一不幸の事あらば神葬祭にて執行すべしと答へられたり。然るに大隈家にては四十五年来かつて一度も棺を門内より出したる事なかりしかば、墓地等の準備もなさざりしに、此度刀自永眠せられしにつき、茲に初めて東京に墓地を定め、遺骸は遺言に従ひ神葬式にて埋葬することとなりたり。されど旧年のこともあればとて、同家にては遺髪だけは郷里に送り菩提寺に於て更に仏葬式を営み、年回法事の如きも正式以外に特に仏式にて営む筈なりといふ。

こうして大隈の母三井子の葬儀は神式で執行され、護国寺の墓地に埋葬された。その模様を、一八九五年一月八日付『東京朝日新聞』は次のように報じている（ルビは削除し、適宜、句読点等を付した）。

●大隈伯母堂の葬儀　大隈伯の母堂彭壽院殿の葬儀は予期の通り一昨日午後一時早稲田なる自邸出棺、音羽護国寺に於て執行せられたり。此日会葬者（中略）其数無慮八千余名、当日葬主は大隈英麿氏徒步にて柩に随ひ、伯爵並に令夫人は喪服にて馬車に乗じ、護国寺門前より徒歩して神殿に至り、午後三時頃奏楽と共に一同着席、千家氏の祭式あり。次に近親の礼拝、鳩山専門学校総代の祭文朗読等ありて午後五時式を終れり。葬儀の通路は見るもの山の如く、牛込警察署より特に巡査二十余名を派出して警戒を加へしめたりと。

前掲の『郵便報知新聞』の記事によれば、大隈家が護国寺に墓所を求めたのは、母親死去の際ということになるが、

その経緯については明証を得るに至っていない。『護国寺史』（護国寺史編纂委員会編、護国寺、一九八八年）は、護国寺の旧境内地東端に豊島ヶ岡御陵が設けられたこと（一八七三年）、三条実美の墓所が護国寺に定められたこと（一八九一年）などから、「護国寺の霊域を墓所とする者が続出し」たと記している（三一五―三一六ページ）。同書は、「護国寺境内の墓地」と題する次のような『明教新誌』（三一六〇号、一八九二年一月三〇日）の記事も載せている。

小石川護国寺境内の墓地は、同寺本堂の裏手に当る一隅にありて、其の広さは千坪以上もある赴きにて、普通の共葬墓地とは違い、恐れ多くも御陵に接続の地とて、容易に俗眼に触ることなく、自ら尊くして之を仰ぎ之を拝み、満目の風景只だ何にとなく威厳の盛んなるを見るべきが故に、已に故三条公爵を始めとして、故山田・黒田の両伯、及び千家男爵等も夫れ／＼予約ありと云う、（下略）

こうしたなかで、大隈家も護国寺に墓所を求めたものと推定される。ちなみに、もともと護国寺は、幕府の祈願寺として特別の保護をうけ、檀家をもたなかったため、明治維新後は経済的な苦境に陥り、さらに境内地の上知、本坊・護摩堂等の焼失（一八八三年）などもあって、厳しい現実に向直していたようである（『護国寺史』などによる）。なお、三条実美の葬儀（国葬）は、豊島ヶ岡の宮内省所属墓地（護国寺境内）において神式でおこなわれている（『東京朝日新聞』一八九一年二月二日付・二六日付）。

大隈重信の葬儀も神式で行われた。『大隈侯八十五年史』（第三巻）は、「神饌が供へられると千家斎主は神官を従へて墓前祭の祝詞を読み、君の功績を礼讃して平安を祈念した」（六三八ページ）と記している。

ただし、大隈の葬儀を仏式とするか、神式とするかで議論があったことを、『東京朝日新聞』一九二二年一月一日付はつぎのように伝えている。

墓地は略音羽護国寺に決定し、(中略)葬儀を仏式とするか神式に依るかに就ては親族間にも意見区々に分れてゐる。之れは侯爵母堂が逝去した際、同家祖先来の仏式を廃して初めて神葬に改めた。然るに親族中にも異説が起つて更に郷里佐賀の菩提寺である曹洞宗龍泰寺で盛大な法要を営んだ事もあり、殊に同寺は昨年大隈侯を筆頭に多数有志の肝煎りで本堂庫裡を改築されて居る。斯んな有様で親戚中にも仏式唱道者もあつて、全くそのいづれとも決定して居ない。

大隈家の佐賀の菩提寺龍泰寺は曹洞宗である。護国寺は真言宗である。しかし、母にならつて大隈重信の葬儀は神式で執行され、神式をもつて護国寺の墓地に葬られた。そして、佐賀の龍泰寺には遺髪が送られたのである。

以上、二〇一八年に「遭遇」した大隈に関わる疑問に対し、若干の考察を加えた。ちなみに、二〇一八年は大隈重信生誕一八〇年の年にあたっていた。

註

(1) 二〇一五年一〇月に開催した完結記念のシンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと―大隈重信へのまなざし」における各報告は、『記要』第四八卷(二〇一七年二月)に掲載。

(2) その一端は、完結記念シンポジウムにおける大庭邦彦報告「史料を読む―大隈重信宛書翰の翻刻・校訂作業を手掛かりに」(『記要』第四八卷、二〇一七年二月)、および友田昌宏「『大隈重信関係文書』の年代推定に関する覚書」(『記要』第四七卷、二〇一六年二月)で明らかにされている。